

# 巨匠への第一歩

昭和会展・最新世代の魅力——特別編

撮影：船寄剛  
本文構成：丸山かおり  
取材協力：吉兆西洋館

## 第47回展 「松村謙三賞」 第66回展 「二紀賞」

# 原田圭

本企画が連載化される前に、第47回の昭和会展松村健三賞受賞作家として2012年8月号の座談会に登壇した原田圭さん。昨秋、間髪いれずに第66回「二紀展」にて、一般出品の最高賞である「二紀賞」を受賞。その才能がいよいよ本格的に輝きを放とうとしている。

そこで今回、特別編として再登場のリクエストに応じてもらった。彼女が最新のポートフォリオを開くと、コレクター、画家、評論家、と立場の違う3氏が目を輝かせて見入っていた。

### 【ホスト】

松村謙三（ブリヂェ企業再生グループ代表取締役社長・大阪大学 知的財産センター招聘教授）

山本貞（洋画家・日本芸術院会員）

南畠宏（美術評論家・女子美術大学教授）



第47回昭和会展松村謙三賞受賞作品《お椀雨》の前で。右から洋画家・山本貞、作家、ブリヂェ企業再生グループ社長・松村謙三、美術評論家・南畠宏の各氏



お椀雨 2012年  
91×116.7cm パネル、石膏地、卵テンペラ  
第47回昭和会展松村謙三賞受賞作品  
「畑でスケッチしていた時に、スプリンクラーや、畑の作物から感じたものを作品にしました。目隠しているのは、畑にかかっていた霜よけの不織布から連想しました（原田）」



歩行フキ 2012年 97×130.3cm  
パネル、石膏地、卵テンペラ  
第66回二紀展二紀賞受賞作品  
「東北芸工大での修了制作作品の一つです。フキの葉脈や全体の形状が気に入ってスケッチしている中から、植物と人間を逆転させてみようと考えて作品にしました（原田）」



はらだ・けい  
1987年山形県生まれ。2010年二紀展入選。11年第65回二紀展奨励賞。12年第47回昭和会展松村謙三賞受賞。同年、東北芸術工科大学大学院修了、東京藝術大学大学院に進学。第66回二紀展二紀賞受賞。

「やっぱりこの子は天才だな！」

松村 先日、二紀展で彼女の作品を観た瞬間、息をのむような、いや、凄く不思議な感じを受けた。この子は、やっぱり天才だな！ 周りにたくさん作品が並んでいたけれど、他の絵が目に入らなかった。思わず、山本先生に「これ、買いますよ！」って言ってしまいました。絵から彼女の不思議な魂が出てくる感じだね、なんて言うかな？ 内なるものが違う！ 他の作家だとモチーフが同じ作品だと受ける印象も似た感じだが、原田さんの作品は、モチーフが同じようでも、受ける印象がまるで違うんだな！

山本 松村社長が（二紀展の）会場に来られたのは初日の早い時間で、まだ受賞の札もついていないときでしたね。社長が気に入った絵が、たまたま二紀賞をとることになった。得票数は最多でした。

この受賞はつまり、二紀会の審査員たちが支持したことでもあり、これをもって自動的に準会員になります。（昭和会展を主宰している）日動画廊でも広く見てもらえる場に到達できたわけですから、24歳にして非常に順調なペース。期待値が高い分、今後は大変かもね。

初めて原田さんの作品を見たときは、ずいぶん不思議な、奇妙な絵だなあと思いましたよ。木原（正徳）さん（注・原田が

太古の記憶というか……

ずっと繋がっている感覚を描きたい

——原田圭

ポートフォリオの中で一同が絶賛した作品「スケッチをしはじめて間もなくのころ。小さな植物が群生する場所で『震え』のようなものを感じて、それを作品化しました(原田)」。『震え』とは植物と自身との共振のようなものを原田流に表した言葉



当時在籍していた東北芸術工科大学の担当教官)も「いやあ本人もちょっと変わった感じですよ」と(笑)。

原田 ……木原先生、そんなことおっしゃられていたんですか!

山本 二紀会でも、3年前の最初の出品のときなんか、審査員たちはどう解釈したらいいのかわからなかったみたいなんです。でもだんだんと、「原田ワールド」にひきこまれた。

大きな絵でも構造的に下図を描いてトレースして、という感じがなくて、植物と人間のかたちが自然に重なっていますよね。これは僕の想像だけど、東北・山形という、彼女が生まれ育った土地の風土から自然と出てきたような、あの意味で僕たち農耕民族を代表するような表現だから、てらいがない。現代とは何か、近代とは何か、なんていう考えではなくて、ごく自然に先祖からの流れ、植物に囲まれた環境とのつきあいから生まれてきた表現になっている。だからすぐに面白く受け入れられた。新しい世代の絵としては珍しいのかもしれない。

南 原 (ポートフォリオを参照しながら) 彼女はちよつと特別ですね。絵を描くことが好きで

まつむら・けんぞう  
ブリヴェ企業再生グループ株式会社  
代表取締役社長。他に大阪大学  
法科大学院招聘教授、大阪大学  
知的財産センター招聘教授、経済  
同友会金融市場委員会委員も。  
来年、「松村謙三美術館」を清里  
にオープン予定



## 内なるものが違う! 不思議な魂が出てくるよう

松村謙三

しょう? めちゃくちゃ好きなんですよ? 無条件に好きなんだということがわかります。先ほど松村社長が、気持ちよく感想をおっしゃっていて、心からの言葉として伝わってきましたけれど、彼女自身も頭で考えて描いているんじゃない、心で描いているところ、大きな魅力ですね。

ポートフォリオを見る限りでは、ドローイングは難しいことを考えないで自分をリフレッシュするような作業になっています。気に入っている植物は何かあるんですか?

原田 いえ、特に……。描こう、と思える草じゃないと制作が続かない、というくらいです。ただ3〜4年前に比べると、だんだん描けるものも増えたので、選ぶ草の種類も変わってきたかな……。私自身が描くものを選んでいくんじゃない、植物からの視線を感じた私が、植物から引っぱられているんじゃないか、と言ってくれた人がいました。へえっと思いました。

山本 ブドウの生育をよくするためにボルドー地方では畑にクラシック音楽を流しているとか、植物がツルをのぼしてからみつくのは、嗅覚があるためとか、植物には弱電流が流れていて、それで意思を表しているとか——植物はワン

う入口から、つながりを描いているというか。

原田 はい、少し前まで、言葉にするときは「震え」言っていたんですが。人間同士であれば話をしたりして繋がっていくように、深く掘っていくば人間と植物という違うもの同士でも下のほうで繋がっているんじゃないかと。

植物をメインに描きたいわけじゃなくて太古の記憶みたいなものや、もつとすごく昔の、すごく奥にあるものをどうにかしたい。それがずっと繋がっているという感覚を、画面にと

どめてみたい。

松村 花とか植物とか、そういった形状にとらわれて描いているわけじゃない、それが作品の不思議さに繋がっているんですね。私はてっきり彼女が植物と話をしようとしているのかな、植物が友だちなのか、と思っていたんだけど。友達いる? いるならなお不思議だなあ。(笑)。

原田 い、います、大丈夫です!(笑)

## テンペラとの出会い

——ところで、素材であるテンペラとの出会いは、どういう経緯でしたか。

原田 (東北芸工大で) 学部の2年生だったときに授業でさわったのが最初です。油彩と合わせた混合技法で使ってみてびっくりしたんです。でも……それからやり方がだんだん合わなくなってきて。どうしようかなと思っていた頃に、藝大から出ていた卵テンペラの本を買ってやっ



やまもと・てい  
洋画家。現在、日本芸術院会員、  
二紀会理事長、日本美術家連盟  
常任理事。1934年東京都生まれ。  
58年武蔵野美術学校卒業。72年  
の第8回昭和会展での優秀賞作家  
でもある

## どんな研究にも先んじて 植物の声が聞けている感じ

山本 貞

ちゃんのようにすぐに意思の疎通が図れるわけじゃないからそういった研究が必要なわけだけど、君の場合はそんな研究よりも先に植物の声を聞いてしまっているのかもしれないね。

原田さんが東京藝大に進学するにあたって、(出身の東北芸工大の) 木原(正徳)さんが「アスファルトジャングルの東京に行ったら、お前さんの絵がダメになる」と心配していました。

原田 それも当たっています、やっぱり山がある環境のほうがいいです。でも、藝大の構内にもいっぱい草は繁っていますし、土日は大学がお休みなので、電車に乗って奥多摩とか遠くの方へ出かけます。

——園芸などはされないんですか?

原田 そこらへんに生えているほうが……。勝手に生えてくるほうがいいです。

南 原 描く対象が人であろうと植物であろうと、植物の不思議な素材感をとらえたトータルの仕事として「植物図鑑」と呼んでもいいでしょうね。解剖学も好きでしょ。

原田 ああ……はい! 解剖学の図鑑とか好きです……描くだけでも満足(笑)。

南 原 フイレントツエに「スペツコラ」という博物館がある。その中に十七世紀の解剖学の実態を伝えるコーナーがあるんですけど、血管からなから精巧に作られた蠟人形の人体標本。原田さんが行ったら面白くてたまらないと思う。植物にある「管」は、血管にもイメージが繋がってくるでしょう、むしろ植物というより、そういうイメージへの関心ですね。植物って

てみたら、しつくり来て。パネルに麻や綿布を張って石膏を塗って膠で止める、というやり方にしたらうまくいって、今に至ります。

南 原 じゃあ本当の壁画と同じだ。なかなか定着しないでしょう?

原田 色の使い方がなかなかつかめなくて、今までは制作に手間取っていました。石膏だと絵具がスツとしみこんじゃう感じで、乾くのがものすごく早くて。ぼかしたりできないので色やタッチを計画的に考えて進めないといけなくて。

南 原 テンペラは難しいし、手間も時間もかかるし、テンペラ自体の声を聞かないとできない素材。それに比べれば、手取り早いものはたくさんあるのに。

原田 そうなんですけど……以前は鉛筆で描くのが好きだったんですけど、テンペラはその感覚に近かった。にじみやぼかしが全然出なくて、デッサンで使う鉛筆みたいだと思いました。

あと、画材屋さんでできあがっているものを買ってチューブで使うのは楽なんですけど、なんかこう、内容と結びついてこないというか。

——なるほど。

原田 それと、この「卵を使う」ということに、入口というかスイッチというか……そういうものを感じているところがあって。いろいろ不便だけど、自分自身でもかなりそこに気持ち



草まわり 2012年 18×14cm  
板、石膏地、卵テンペラ

「人も植物も一体となった連なりを象徴的に描いている」と南島氏が絶賛。「人体とその外にあるものに少しリンクするものを感じて描いたものです(原田)」



作家によるドロイーイングの数々。人の血管とカエルの卵との間に感じた生命の共感、植物も人も同じ根で繋がっている実感……人の理とは異次元の、もっと大きな視点から捉えられた自在なイメージに、現場の一同は興味津々に見入っていた



ちよつと似ています。草は  
いっぱい生えていてほとん  
ど一緒なんですけど、ただ、  
描かなければいけないな、  
というものがあって。人を  
選ぶ時そんな感じじゃあ  
ない(笑)。  
南島 基準がよくわからな  
い(笑)。

——たしかに(笑)。そう  
いったモデル探しも含め、取材、スケッチ、下  
絵、タブロー制作と、作品のプロセスはいろい  
ろありますが、どの段階がいちばん楽しいです  
か。

が張り付いているというか。卵を割って、お菓  
子を作るみたいに黄身を分けて、顔料と水を  
練って一色一色を作ったらそれをパレットで混  
ぜて……。自分で材料に触って絵の具を作る感  
じが好きですし、どろっとした質感も自分が表  
現したいテーマに合っている気がします。

南島 できあがった後の堅牢さにおいては、テ  
ンペラに敵うものはないですよ。原田さんは、  
ご本人も作品に内包されるような独特の時間の  
流れを持っていますね。描こうと決めてから完  
成するまでの道のりも、きつと同じ。「遠回り」  
がすごく好きな人なんじゃないかな。(テンペ  
ラ技法の本場である)イタリアで勉強したい気  
持ちはないんですか？

原田 大学のゼミで勉強中なので、今はそうい  
う考えはないです。さらに自分がしたいことが  
出てきたらその時は考えると思いますけど。

——松村謙三賞の受賞作と、二紀賞を獲った頃  
の作品とは同じ技法でも質感が違うように見  
えます。何か制作に変化があったんですか？  
原田 少し前までは壁画に影響されていて、絵

具の物質感が好きなのもあって表面をポロポロ  
に仕上げたんですけど、最近はその質感をやっ  
ていないです。薄く塗ったときの透明感をいい  
質感だと感じるようになって……。あと最近はず  
毛を使っているの、それで少し違うのかな。  
南島 そういえば、あまり強い色は好きじゃな  
いのかな？

原田 ドロイーイングだとわりとよく使っていま  
す。タブローより、ドロイーイングとかスケッチ  
のほうが、自分の中ではけっこう大切で、最近  
はタブローを、ドロイーイングで描くような感じ  
に近づけたいと思っていますところなんです。

——ところで、作品中でよく描かれている女の  
子は、ご自身なんですか？

原田 妹です。描くイメージに近いんです。知  
らない人ががんばって声をかけてモデルを頼ん  
だこともありましたが……。草を選ぶ感覚に

ければ、自分自身を許せないように見える。そ  
ういう点に一生懸命になれる意識の高さは、昨  
今の画家の中ではかなり稀有だと思います。

### 人の世の理を超えたものを見つめる

山本 今日の原田さんはちよつと褒められすぎ  
かな(笑)。でも、意外にしっかりしているん  
だよ。これだけワーワー語りかけられても動  
じないもんね。見た感じとても小さな子、その  
子がまた小さな声でぼそぼそ話すから、いつも  
「大丈夫かなア」と思うんだけど。

松村 松村謙三賞の表彰状を渡す時、「いやあ  
この子があの絵を描いたんだ！」あまりに幼い  
感じがしたので、びっくりした。しかし、外見  
通りでは、ああいう絵はかけないよな！ 精神  
年齢不詳だね！

南島 彼女は「帰るべき場所」というか、人の  
価値観を超越した世界の理を見ている人ですよ。

みなみしま・ひろし  
美術評論家。第53回ベネチア・ビ  
エンナーレ日本館コミッショナー、国  
際美術評論家連盟理事、全国美  
術館会議理事等を歴任。現在、  
女子美術大学教授。1957年長野県  
生まれ



## 人の価値観を超えた 世界の理を見ている人ですよ

——南島 宏

だから、怖くないんでしょう。見た目は幼い感  
じだけど意外に老成してるんじゃないかな。  
山本 見た目と違って、と言っては失礼だけ  
(苦笑) 優秀なんです、彼女は。東北芸工大で  
学部、修士と行って、そのまま藝大に来て、隙  
間なくポンポンと進んできた感じなんです。  
原田 はい。でも、東北芸工大を受験したのも、  
高校時代に「どう生きていこうか」と考えた  
きに、他のことがピンとこなかったからで——  
入学後、同級生には作家になると公言している  
人もいて周囲の意識の高さに圧倒されました。  
実は学部時代も、民俗学の授業にフラフラとし  
ていて絵を描いていなくて。

山本 中沢新一が好きなんだけ？  
原田 もともとは宮澤賢治が好きで、その関連  
で中沢新一さんの本も参考にしたらしい。あと、  
南方熊楠も好きです。前の大学でそのあたりの  
研究もすごく盛んで、面白かったの。  
——その興味が、最終的に絵に向かっていた  
のは何かきっかけが？  
原田 きっかけというか、自分はおっかなびつ  
くり進んでいるところがあって……。一つひと  
つの出来事や人との出会いのたびに選択しなが  
ら、少しずつ絵をやっていくという気持ちを持  
固めてきたように思います。

——昭和会展での受賞もその気持ち固めにとつ

全部好きです。だから、二紀展などの出  
品の時は「タブローを出す」と限定されること  
がモヤモヤして困るんです。スケッチも、ドロ  
イーイングもすごく好きだし、全部作品として出  
したいけど、今はあれしか出せない。  
南島 本来は全部出しかまわないと思うん  
だけ、出す場所とタイミングは大事ですね。原  
田さんは今、いくつかのパターンを繰り返して  
いつているところなんでしょう。ただ、彼女は  
モチーフが天国であっても地獄であっても同質  
の絵画として描ける画家だと思うんですね。松  
村社長が「内なるものが出てきている」と表現  
したのは、まさにそういう、世界が色分けされ  
る前の状態の純粹なビジョンであることを指し  
た言葉なんですね。

それともうひとつ、ものすごく表面の処理を  
大事にしていますよね。ある純度まで達しな

て大きな役割を果たしたことと思いますが、あ  
の時はどんな気持ちでしたか。

原田 ええと……。修了制作と受験に追われてい  
たので覚えてなくて(苦笑)。

山本 僕は覚えてるよ。昭和会展のあとに皆で  
喫茶店でお茶を飲んでるときに「松村謙三  
賞の」賞金はどうした？ ちゃんとしまっ  
た？」って訊いたら、君はあわてて自分の鞆を  
ごそごそ確かめた。大きなお金を急に受け  
取ったものだから、びっくりしたんだよね(笑)。  
松村 原田さんに限らない話だけど、今後どん  
な作家になるのか、ということよりも、まず賞  
が励みになるのであれば応援してあげたいとい  
う気持ちがある。そうじゃなければ続けませ  
んよ。賞を作るきっかけは日動画廊さんに頼まれ  
ただけだけど、200万円という価値が、い  
や「お金」というよりも「賞」ですけども、私  
の想像以上に励みにしてもらえらんだなあ、と。  
自分の名前をつけてちよつと恥ずかしいなとか  
おこがましいな、とか思っています。

南島 原田さんは、松村社長がビジネスの現場  
で鬼の形相で働いているところを植物であらわ  
して描いたらいいんじゃない。(笑)

山本 原田さんの作品は、南島さんが携わって  
いる「ベストセレクション展」(東京都美術館)  
に二紀会から推薦したので、来年5月にはそ  
ちらで作品も見られますね。

原田 はい、ありがとうございます。あとその  
前に、4月には六本木の湘南台ギャラリーで個  
展をやりまます。どうぞよろしくお願ひします。

展をやりまます。どうぞよろしくお願ひします。